五・六年生の学級担任マニュアル

学習の遅れを取り戻す

——学業不振への対応（即時対応と根本対応）

上越教育大学准教授
橋本定男（はしもとさだお）

五・六年の担任になった。学習が遅れがちな子どもが多い。学業不振対応が課題だ。子どもたちのなんとか遅れを取り戻したいというまなざしを感じる。期待に応えたい……。このような状況への対応策を考える。

学業不振の子をつくらない授業チェック

その前に、不振にあえぐ子どもを再生産していたら話にならないので、授業の心構えをチェックする。

□スモールステップの展開計画をもって進めている。
□なんど間違えても安心な雰囲気づくりをしている。
□〝わかりやすく、繰り返して〟を常に心掛けている。
□学習方法やノート指導など学び方を指導している。
□体験につなげるなど納得ある理解を目指している。
□「つまずき」に対し個別にサポートしている。

✓が付くほど、理解や習得に時間のかかる子どもを支えながら学級全体の力を伸ばす授業のあり方がわかっていることになる。わかっているとして対応策を考える。即時の対応と根本の対応の二通りがある。

即時対応① 放課後の個別指導

学習に遅れるのは理解や習得につまずくからである。つまずきには即時に対応したい。教え直し・やり直しの時間をつくり個別につき合うことだ。放課後の居残り指導が今も昔も典型である。しかし、今は放課後の時間確保がきわめて難しい。そこで、

○週に一日、放課後に個別指導の時間を設定する。補充学習の時間帯が学校体制として保証されることが

望ましい。それがなくとも最低週一日はやりたい。
○このとき保護者（住民や学生）のボランティアを活用したい。また学年協働体制を組み、交代で放課後指導にあたるやり方もある。これからの方向である。

即時対応② 学級内・単元内の習熟度別指導

理解や習得に時間のかかる子どもに対応する基本はきめ細かな指導である。少人数学級・習熟度別指導が浮かぶが、学級の中で即時にやりたい対応がある。
○学級の授業において単元の中に習熟度別グループ指導の時間を設けるのである。遅れがちな子のグループではていねいな説明や繰り返しの学習を増やすことができる。グループ内での学び合いの活動を充実させることが大切だ。グループを越えたかかわり合いも効果がある。保護者ボランティアを生かしたい。
○また、学習課題として基礎から活用、発展までスモールステップ化したプリントを用意し、自由に挑戦させるやり方も有効である。マイペースの取り組みを保証できる。補充・発展学習として広がっている。

根本対応

学習の遅れを取り戻す根本の解決は、その子が取り戻す力を身につけることである。遅れを取り戻すとは、理解や習得に遅れた学習内容があるとき、その子が

(a) このままではよくない、わかりたい、できるようになりたいという前向きな思いをもつ。

＝「意欲」

(b) わからない・できないに対処する方法がわかり、実践し、わかった・できたという結果を得る。

＝「学習の方法・手続き、学び方」

(c) それらの方法を駆使して結果をつくり、自信をつける体験を積んでいく。習慣化されていく。

＝「学習習慣」

このプロセスをたどっていくことである。
学習の遅れを取り戻す力は自ら学習を進めていくための意欲・方法・習慣の統合された力と言える。この

力を学習に遅れがちの子に育てることが根本対応となる。やり方としては次の二つにまとめられる。

(a) 意欲
(b) 学習の方法、学び方
(c) 学習習慣

学習する力の育成

家庭学習習慣の形成

①学習する力の育成

学習に遅れがちの子は学ぶことを支え促す基盤的な力が弱い。だからつまずきやすく、理解や習得に時間がかかる。その力を「学習する力」とする。二つある。

(ア) 学習意欲、学習態度（学習を始め持続させる意志）

(イ) 学び方、学習の仕方（勉強の仕方、授業の受け方、予習復習の仕方など）・手続き（質問の仕方など）、学習のスキル、ノートのとり方、辞書や図鑑、ネットの使い方、詳しく調べる手順など

大切なのは、個のニーズに応じて必要な方法や技術をよく教え、適切に使うことを支援し、わかった・できたという結果をつくる体験を積ませることである。

②家庭学習習慣の形成

今や学校には時間がない。理解や習得に時間がかかる子にとっては一層である。家庭での学習のあり方が重要になる。一方、学習する力は習慣化してこそほんものとなる。方法やスキルが駆使され、身についたか試されるのは教師のいない家庭での学習である。よって、家庭学習習慣の形成が根本的に重要な対応になる。

○家庭学習のやり方（方法・技術）がわかること。
○やり方が適切だったか。結果の点検と助言がいる。
○継続・持続が大切だ。教師の細かいサポートがいる。
○家庭学習によるよい結果を実感し、自信をもつこと。

以上を具現する責任は担任にある。中心は担任である。